

“Stay strong !” ーロスから来学した学生たち

経営学部教授
(国際交流センター長) 大津 幸一

それは、2年前(平成23年)の夏、ロサンゼルスからカリフォルニア大学ロサンゼルス校(UCLA)の名誉教授ポール・テラサキ夫妻が本学を訪れたことから始まった。

氏は、組織移植研究の第一人者で、組織タイピング(組織適合性検査)や臓器移植について世界中で講演を行っている。また、妻のヒサコ夫人とともに日米関係や日系アメリカ人コミュニティに強い関心を持っており、UCLAのアジア系アメリカ人研究センターへ基金を設立し、日系アメリカ人に関する体験や問題点などの研究のために来日する大学院留学生を対象に特別奨学金を提供するかたわら、UCLAにおける日本研究・日米関係の分野の専門家を育てようと、優れた教育プログラムをサポートするポール・I・テラサキ基金(Terasaki Foundation)を設けている。

坂田学長との会談は終始なごやかな雰囲気で行われた。その中で、氏はUCLAをはじめとするロスの大学から学生をぜひ日本に送り、東日本大震災の被害状況を自分の目で確かめるとともに、日本についての理解を深めさせたいと語った。その中には、もちろん、本学との交流も含まれる。坂田学長は、その企画に基本的に合意を示した。

ことは、予想以上に早く進んだ。その年の12月21日、第一陣が来学した。総勢23名の学生たちである。日系人が多数を占めた。Christmas Japan Educational Tourと銘打ったこのツアーは、成田から仙台、南三陸町を経由して石巻を訪れ、東京、さらには京都の大学や名所を巡ろうという本格的なもので、いわばアメリカ版・

修学旅行。

バスから降り立った学生たちを正面玄関から4号館へと案内。4101の階段教室で坂田学長の講義を聴くためだ。何かと多忙な中、学長には1時間ほどの時間を割いていただいた。

「よく、いらっしゃいました」と流暢な英語での講義が始まった。演題は“Ishinomaki Senshu University after 11 March, 2011” ユーモアあふれる話しぶりに魅了されたのか、学生たちはメモを取りながら熱心に耳を傾けていた。後で書いてもらった感想に、次のように記した学生がほとんどだった。

「坂田学長の英語でのレクチャーに感銘を受けた。感動的で面白く、得るものが多かった。」

「レクチャーによって、前日南三陸で見た被災の様子のインパクトがより強まった。また、震災に大学および石巻市がどのように対応したかについて数多くの詳細な情報が得ることができ、とてもよかった。」



坂田学長のレクチャー

講義の後は図書館に移動して石巻に押し寄せた津波のビデオを見せた。アメリカのテレビで見ていた映像も現地で見ると現実味が違うという感想を抱いたようだ。

お昼は学生食堂で。準備していた全員が同じメニューの食事をとった。しばし休憩の後、バスで市内の日和山に向かう。

バスの車窓から見える街の様子。そして日和山から望む旧北上川河口付近の荒れ果てた景観をまのあたりにして、次のように感想を記してくれた。

「被災地を自分の目で見て、テレビの映像とはだいぶ異なっていることに気がついた。津波がどんなに強烈で怖いものかを再認識させられた。」

「津波の到来を報じるニュースをアメリカで見たときは、この世のものとはとても思えなかった。そのようなことが現実に行き起きているなんて信じられなかった。しかし、石巻に来て被災状況に間近に接し、本当に起きたんだと実感した。破壊の凄まじさには、まったく驚かされた。しかしながら、たいへんな目に遭いながら石巻の人々は希望を失わず、前向きだ。」



日和山より旧北上川方向を見る

日和山をあとにして、次にバスは渡波のサンファン館へ。被災したために一般公開はしていなかったが、ご理解をいただき、研修室でサンファン・バウティスタ号にまつわる歴史と伊達藩についての簡単なレクチャーを大津がおこなった。学生のほとんどが日本の歴史や文化にとっても興味があるらしく、熱心に聴いてくれた。そのあ

と、相当な被害をうけながらも津波に耐えたサンファン・バウティスタ号を眼下に眺め、学生たちは感慨にふけている様子だった。

ふたたび大学に戻った。本学の学生たちとの交流会のためである。経営学部の茂木ゼミ、丸岡ゼミなどから多数の学生が集まり、英語と日本語と身振り手振りでお互いにコミュニケーションをはかった。時間が経つほどに会場は和やかな雰囲気に包まれた



本学学生と交流会

学生たちが帰りのバスに乗り込む頃には、日がとつぷりと暮れ、正面玄関前の木に飾られたイルミネーションが彼らを見送った。

その後、ロサンゼルス(Terasaki Foundation)の主催で、the Japan Tripと銘打ったツアーが3回企画され、そのつど、一日だけだが以下の日程で石巻そして本学にアメリカの学生たちが訪れた。人数は、いずれも23名~25名である。

震災に関する取り組み

平成24年3月26日

6月22日

12月20日

このうち、6月22日は、七夕を前にしての図書館の七夕飾りに学生達は、短冊に次のような思いを記した。

「すべての震災と津波の犠牲者に神さまの祝福を。
石巻の一日も早い復興を祈ります」

「苦難に耐えてください。Stay strong! 決してあき



図書館の七夕飾りに日本と石巻への思いを記す

らめないでください。世界中の人々が心にかけていることを忘れないで」

「日本の皆さんの助け合いの精神をアメリカの人々も心にいただきますように」

学長の講義および市内見学と、上記の1回目とほとんど同じ企画であったが、被災状況を自分の目で確かめようという学生たちの真摯な姿勢は変わらなかった。また、本学にとっても有意義な訪問であったと確信する。

最後に、石巻そして本学での一日を振り返って、さまざまな感想を記してくれたが、その一部を紹介したい。

「震災後、石巻専修大学が被災した学生のケアだけでなく地域のためにどれだけ貢献したかを知り、感銘を受けました。復興には20年～30年を要すると聞き、たいへんだと思いますが、お互いの助け合いで、必ずや立ち直ることと信じています」

「被災状況を目の当たりにして言葉もありませんでした。あまりの悲しさに、もどって、私にできることがあれ

ば何でも手助けしたい気持ちにかられています。いろいろと親切にもてなしていただいた石巻専修大学に感謝します。日本語そして日本文化について、もっと学ばねばと思いました。今日は、これまでの人生で一度もしたことがないような貴重な経験をさせていただきました。『自分になにができるか』という問いが浮かんできます。アメリカに帰った後も、この問いに対する答えを見つけてゆきたいと思います。この悲劇から立ち上がる日本の新しい世代のリーダーたちに期待します。土埃と瓦礫の中から、何か美しいものが生まれると信じてやみません」

「(坂田学長の講義の中で)震災後の混乱の最中、ささやかだけれども密度の濃い卒業式を行ったと聞き感銘を受けました。4年生にとって卒業というものがいかに大事な行事かということ、よく理解されてのことだったと思います。石巻専修大学が学生に精神的な支えを提供したこと、学費減免などの配慮をしたことに感心しています。日本人の助け合いの心が、このようなところにも現れているのでしょう」



石巻市内にて